

〔嬉遊笑覽^{十上}〕古き菓子どものかたかけるは貞幹が集古圖卷十九果子圖二十七種出たり、又近
き頃、本多氏の君高橋家濱島家に傳ける、古き果子の形三十八種を土をもて模し造り、それに添
られたる考を搏桑果と名付て、塵泥といふ書の中に收められたり、

〔假名世説〕延寶二年、道久下人彦作が書ける國町の沙汰に云、木挽町山村が芝居にて、^略中棧敷も

そこく、終日の慰にとてさげ重、せいろうの色ことに艶なるに、鹽瀨まんぢうさ、粽、金龍山の
千代がせしよね、饅頭、淺草木の下おこし、米は、木の下おこし、米は、勢州山田の者、來りてこし、白
の彦左衛門がべらばう、焼て、ごまなかけ、其色くるにし、八丁堀の松尾せんべい、日本橋第一番高
砂屋がちりめん、まんぢう、麴町の助三ふのやき、兩國橋のちいらたう、ちやうらたうは、風味甚甘美
諸病に宜しとて、芝のさんぐわんあめ、大佛大師堂の源五兵衛餅、源五兵衛餅、おまんかたみにせ
今専ら賞翫す、ゆん珠にして丸し、おし、武藏の名物とりと、のへさん敷に忍び入り、終日あく氣色もなきは、櫻姫
となりし類之助を露のゆかりの玉かづら、心にかけて思ひ染めしなるべし、

按、延寶の比の江戸の名物こゝに盡くせり、此頃いまだ兩國橋の幾代もち、金龍山の淺草餅、本
郷笹屋のごまどうらん、鎗倉がし豊島屋の大田樂、市谷左内阪の粟焼などはなしと見えたり、
今にのこれるは、麴町の助總ふのやきばかりなり、洞房語園にふのやきの事みえしは、ふるき
事なり、

〔嬉遊笑覽^{十上}〕和漢三才圖會に載たる果子どもは、はるてい、まがり、ぼうる、^{みな}花ぼうすは、ま
め、飴人參糖、あるへい糖、^穂のやうにふくたて、まげも有り、かるめいら、^今の製とは殊なり、すは、ま
今大黒に供ふる七色菓子も、^{庚申}の菓子なり、^此類にみどりはいふと見ゆ、^{夷曲}衣櫃、^{源子}かや
集に、ときはなる松のみどりも、^春くへば、^今ひとしほの菓子のあちはいふと見ゆ、^{衣櫃}源子かや
り、松の縁、^上に出、^{達摩}隱、^此も有類に、^{ちまき}まんぢう、^{らく}がん、^{白雪}餅、^{粗粒}錫、^{羊羹}外郎餅、^{求肥}加
須底羅、^{糖花}小鈴、^{糖花}の、^{小者}とあれば、^{これ}今のは、^{霞餅}に衣かけたるなり、^名は同くて、^製かばれ